

彙 報

平成25年度広島大学日本語教育学講座言語・文化・教育研究会，特別講演会

◎第9回大会（平成25年6月6日）

○研究発表

【口頭発表】

松原 愛（博士課程後期2年）

分散効果に関する研究の概観

伊藤 亜希（博士課程後期1年）

会話を分析する

ー量的分析と質的分析ー

韓 暁（博士課程後期3年）

日本語シャドーイング訓練における学習者の心理面の変容

李 在鉉（博士課程前期2年）・金 京怡（博士課程前期2年）・福原 涼子（博士課程前期2年）

日本語と中国語の関係節の受身文産出

ーL1とL1，L1とL2の比較を中心にー

【ポスター発表】

見上 史織（博士課程前期2年）

石垣りんの詩について

ー『私の前にある鍋とお釜と燃える火と』を中心にー

山崎優華子（博士課程前期2年）・吉村 拓三（博士課程前期2年）

中級聴解テストの作成と分析

ーよりよいテストの作成を目指してー

北川 有亜（博士課程前期2年）

外国籍の子どもたちに求められる書く力とは

ー中学校への橋渡しとなる作文指導の提案を目指してー

張 明盈（博士課程前期2年）

中国人日本語学習者における日本語動詞句の記憶に及ぼすSPT効果

今里 葵（博士課程前期1年）

日本語学習者がフィードバックから受ける効果

ー他者が受けたりキャストからの影響に着目してー

◎第10回大会（平成25年10月3日）

○研究発表

【口頭発表】

安光 奏美（博士課程前期1年）・アイニン・ソフィアワティ（博士課程前期1年）・

ジャ・ブルブル（博士課程前期1年）・曹 棟君（博士課程前期1年）・董 艶偉（博士課程前期1年）・

費 曉東（博士課程後期4年）・松見 法男（教授）

日本語学習者における接辞を含む三文字熟語の処理過程

ー母語話者との比較を通してー

西山可菜子（博士課程前期2年）

留学生支援を考える：日本人学生チューターを対象とした情報共有の試み

【ポスター発表】

松島 弘枝（博士課程後期4年）

韓国人日本語学習者における日本語漢字単語の処理過程

ー語彙判断課題による検討ー

徐 芳芳（博士課程後期1年）

語彙的多義性の解消過程に関する研究

吉村 拓三（博士課程前期2年）・山崎優華子（博士課程前期2年）

中級聴解テストの作成と分析（2）

ーN3「即時応答」の改善報告ー

帖佐 幸樹（博士課程前期1年）

因果構造からみる動詞の語彙的アスペクト及び「テイル」との関係性

◎第11回大会（平成26年1月9日）

○講演

与那国のことばの記述と伝承・再活性化

山田 真寛（教育学研究科・言語と認知の脳科学プロジェクト研究センター PD 研究員）

【講演要旨】

2009年 UNESCO はアイヌ語、八丈語、6つの琉球諸語を日本国内に存在する消滅危機言語と認定した。本講演ではその内の一つ、沖縄県の与那国島で話されている琉球諸語の一つである「ドゥナン（与那国）語（どうなん-くとうば「与那国-言葉」から。UNESCO 登録言語名は yonaguni）」を取り上げ、消滅危機言語の認定基準および与那国島における記述・保存・伝承活動を紹介した。

UNESCO（2003）は言語の消滅危機度を測定する基準として、世代間継承、言語使用の場面、言語記述の質と量などからなる9つの項目を0～5のスコアで評価する「言語の体力測定（Language Vitality Assessment）」を提案した。2011年文化庁委託事業として実施した調査（山田・ペラルール 2013）と2013年9月与那国町主催シンポジウム参加者約70名を対象に行った測定ではともに、話者が概ね55歳以上であるドゥナン語は9つの項目の平均が1.75～2というスコアとなり非常に危機的な状況であることが確認された。消滅危機言語を保存するとはどういうことか、また保存するべきか、保存する対象（地域差・世代差など）はどのように決めるのかといった問題を提示し、参加者とディスカッションを行なった。その後、講演者が与那国町教育委員会の伝統言語保存・伝承事業の一環として行っている活動を報告した。

言語の保存にはテキスト（音声・映像・文字資料）、参照文法、辞書の三つが必須であると言われている（Tsunoda 2005）。本講演では与那国町教育委員会の事業として編集作業を進めている伝統的なことわざ、昔話、歌を記録した資料を、参照文法作成のために行っている日常会話の記録とともにテキストとして紹介した。テキストは言語データ、グロス（形態素ごとの訳）、意識の三段形式が一般的であり、講演者の言語記述でもこれを採用している。加えて、発音記号に近い言語データ表記の他に、ドゥナン語を表記するためのひらがな表記を提案し、収集されたテキストを話者コミュニティに還元する取り組みも紹介した。語彙集に関しては池間（2005）、法政大学沖縄文化研究所（1987）、参照文法の概要は山田、ペラルール、下地（2013）を紹介し、未記述の問題としていわゆる「喉頭化音」と呼ばれる音素、現代日本語共通語とは大きく異なる敬語体系などいくつかの言語現象を概観する予定であったが、前半のディスカッションに時間を割いたため割愛した。（割愛した部分を含む講演スライドとこれまで発表した論文は <https://sites.google.com/site/dunanbox/> からダウンロードできます。）

○研究発表

【口頭発表】

小口悠紀子（博士課程後期3年）

第二言語における主題の習得

－今後の研究の可能性－

池内 恵那（博士課程後期1年）

近代の角兵衛獅子をめぐる言説について

【ポスター発表】

郭 昱昕（博士課程後期3年）

シャドーイング練習が日本語の特殊音素の知覚と産出に及ぼす効果

白 依可（博士課程前期2年）

カタカナ語の処理における英語の語彙知識の影響

曹 棟君（博士課程前期1年）

中国人日本語学習者のオノマトペへの処理過程の特徴

叶 子（博士課程前期1年）

黙読での日本語文章理解における心内の音韻表象の役割

菅井 陽子（博士課程前期2年）

外国人児童長期受け入れ校の取り組み：A小学校の事例から

陳 嫻如（博士課程後期3年）

名詞の性質と指示詞の省略可能性との関わり

2013年度（平成25年度）日本語教育学講座 歳時記

2013年（平成25年）

- 4月1日 高橋恵利子助教着任
3日 入学式
4日 新入生ガイダンス（学部・大学院）
6日 在学生前期ガイダンス（学部1～4年生・過年度生）
13日 新入生オリエンテーション行事（於：西条共同研修センターグラウンド）
6月6日 第9回広島大学日本語教育学講座 言語・文化・教育学研究会
7月11日 修士論文中間発表会
8月1日 卒業論文中間発表会
7～8日 オープンキャンパス
26～28日 難波康治先生（大阪大学）集中講義
9月12～13日 大学院教育学研究科（博士課程前期）入学試験（一般選抜・社会人特別選抜）
22日 就職・進学ガイダンス
講師：大坂知子氏（愛知国際学院 1993年卒）
糸山由布子氏（株式会社 マツダ 2011年卒）
香川良太氏（福岡県庁 2011年卒）
大廻麻衣子（広島市立舟入高校 2011年卒）
24～27日 金澤裕之先生（横浜国立大学）集中講義
10月1日 在学生後期ガイダンス（学部1, 2, 4年生・過年度生）
3日 第10回広島大学日本語教育学講座 言語・文化・教育学研究会
4日 在学生後期ガイダンス（学部3年生）
11月21～22日 AO 選抜（総合評価方式・フェニックス方式）

2014年（平成26年）

- 1月9日 第11回広島大学日本語教育学講座 言語・文化・教育学研究会
山田真寛先生講演会
2月12～13日 大学院教育学研究科入学試験
博士課程前期（一般選抜第二次・社会人特別選抜第二次・外国人留学生特別選抜）
博士課程後期（一般選抜・社会人特別選抜・外国人留学生特別選抜）
12日 修士論文審査会
14日 卒業論文発表会
17～20日 小河原義朗先生（北海道大学）集中講義
25～26日 広島大学一般入試（前期日程）
3月23日 学位記授与式
31日 町博光教授退職

日本語教育学講座 教職員名簿

2013年度（平成25年度）

50音順・敬称省略

講座主任 畑佐 由紀子

教 授 倉地 暁美 酒井 弘 白川 博之 中村 春作
畑佐由紀子 町 博光 松見 法男

准 教 授 永田 良太 西原 大輔 西村 大志 柳澤 浩哉

講 師 渡部 倫子

助 教 高橋恵利子*

事務補佐員 山田 典子

*2013年度より当講座所属。

非常勤講師授業科目等

<学部>

日本語の変遷	土井裕美子 先生（比治山大学・准教授）
日本語学習とマルチメディア	難波 康治 先生（大阪大学・准教授）
日本語の音声と発音	小河原義朗 先生（北海道大学・准教授）

<大学院>

対照言語学特講Ⅱ	深見 兼孝 先生（広島大学・准教授）
対照言語学演習Ⅱ	深見 兼孝 先生（広島大学・准教授）
日本語史特講	金澤 裕之 先生（横浜大学・教授）

2013年度（平成25年度）論文題目一覧

博士論文

氏 名	指導教員 (主査)	称 号	論 文 題 目
佐藤 智照	松見 法男	博士（教育学）	第二言語としての日本語文の音読における語彙情報 と意味情報の処理 ー単語の音韻符号化の高速性・教示の種類・音読 回数が注意配分に与える影響ー
朱 仁媛	松見 法男	博士（教育学）	韓国人日本語学習者の日本語文章の音読における記 憶過程 ーワーキングメモリ理論を枠組みとした実験的検討ー
Nuria Haristiani	町 博光	博士（学術）	日本語とインドネシア語の謝罪行動の対照研究
張 琳	町 博光	博士（学術）	日中の「慰め場面」における言語行動の比較 ー発話者相互の「慰め」方略ー
費 曉東	松見 法男	博士（教育学）	中国語を母語とする日本語学習者における日本語漢 字単語の聴覚的認知 ー語彙表象と概念表象からなる心内辞書モデルを 枠組みとしてー

修士論文

氏 名	指導教員	論 文 題 目
福原 涼子	酒井 弘	話し合いにおける日本語学習者の不同意表明の仕方 ーポルトガル語を母語とするブラジル人日本語学習者を対象としてー
張 明盈	松見 法男	日本語動詞句の記憶に及ぼす被験者実演課題の効果 ー初・中級日本語学習者を対象としてー
黒田 亮子	畑佐由紀子	教室内におけるPCR活動及びディスカッションを用いた指導の効果 ー授受補助動詞表現「てくれる」を対象としてー
李 在鉉	白川 博之	日韓対照的視点によるアスペクト表現の研究 ー非状態形と状態形の使い分けを中心にー
山崎優華子	渡部 倫子	中国人学習者の音声特徴とそれに対する日本語母語話者の評価 ー動詞のテ形アクセントに焦点を当ててー
西山可菜子	倉地 暁美	留学生支援 ー日本人学生チューターを対象にした情報共有の試みー
卓 孟昭	松見 法男	台湾人日本語学習者の日本語単語の記憶に及ぼす繰り返しテストの効果 ーハイパームネジア現象を指標とした実験的検討ー
劉 霜楓	松見 法男	中国語を母語とする上級日本語学習者における日本語漢字単語の視 覚的認知 ー口頭翻訳課題を用いた実験的検討ー
白 依可	松見 法男	日本語のカタカナ語処理における英語の語彙知識の影響 ー中国在住の中級日本学習者を対象としてー
北川 有重	松見 法男	日本生育外国人児童を対象とした「書くこと」の訓練法に関する研究 ー記憶を伴う視写の実践を通してー

卒業論文

氏 名	指導教員	論 文 題 目
岩本 真実	倉地 曉美	日本のアニメ作品に描かれるドイツのイメージ
佐古まなみ	西原 大輔	サイデンステッカー訳『源氏物語』『末摘花』における翻訳の忠実性 ーウェイリー訳、タイラー訳との比較考察
Ferran Gacia Santiago	中村 春作	近代オリンピック (Bdrlin 1936/Tokyo 1964) における「国民国家」像 ーメディアイベント・聖火リレー・開会式ー
吉村 瑞希	渡部 倫子	日本生まれ・幼少期来日の中国帰国児童に対する国語教育の課題 ー「話すこと」に焦点を当ててー
藤高 真理子	松見 法男	日本語の広告が日本語母語話者と日本語学習者の商品選択に与える影響 ー商品の考慮度と言語情報量の観点からー
水間 大輔	柳澤 浩哉	ライトノベルの条件 ー越境作家の作品からー
浜中 典子	西原 大輔	『ふらんす物語』の中の音楽作品からわかるフランス滞在時の永井荷 風の心境
嘉本 衣里	永田 良太	合意形成談話におけるあいづちの機能
中島 明果	白川 博之	西日本方言におけるアスペクト体系について ー「～よる」「～とる」の対立を中心にー
井原 明美	松見 法男	解答時の確信度がテスト後の記憶に及ぼす影響 ー間違えやすい同音異義漢字の筆記課題を用いてー
荒巻 愛実	松見 法男	影響力のある教師の言葉かけ ーパーソナリティと言葉の印象度に着目してー
周藤 圭美	町 博光	島根県松江市方言における待遇表現
水城 智香	酒井 弘	日本語東京方言における文末の「顕著な下降調」の意味・機能
阿部 翠	町 博光	新潟県中越地方加茂市方言の文末詞研究
稲垣 良	西村 大志	日野皓正にみる音楽性とアイデンティティの変容
西田 朋世	柳澤 浩哉	映画『春の雪』研究 ー文芸映画を成立させるための条件ー
土居友紀子	西原 大輔	星新一研究 ーロボット・機械が登場する作品の分類ー
大野 託矢	酒井 弘	大分県中部方言における可能表現の使用実態と変遷 ー庄内町アンケート調査よりー
城楽 一希	柳澤 浩哉	安部首相の政治演説研究 ー第二次安倍内閣における演説の戦略ー
奥田 茉以	柳澤 浩哉	映画のセリフからみる日米コミュニケーション方法の違い ーオリジナル版とリメイク版の比較からー
安藤 里紗	中村 春作	『竹取物語』における「天」と「世」
若泉 英里	畑佐由紀子	地域日本語教室の支援のあり方 ー東広島市の地域日本語教室を対象にー
富嶋 晃子	西村 大志	電子化されたペットの誕生と変容 ーたまごっちを中心にー
畑山 絵美	白川 博之	敬意表現としての「(さ) せていただく」の研究
光信 亜紀	柳澤 浩哉	桜庭一樹『私の男』における人物論 ー各章における文体表現を手がかりにー

中村香葉子	渡部 倫子	日本語ボランティアを対象としたビリーフ質問項目の開発
星出 真衣	松見 法男	設問の提示時期の違いが文章理解に及ぼす効果
早川 依里	西原 大輔	ミュージカル「キャッツ」の研究
福永 藍	倉地 暁美	中国の日本語教科書『新編日語』におけるジェンダー
大月 菜於	西原 大輔	島崎藤村の「初恋」における表現の特徴について
岡原 武	西村 大志	原発の設置における説得と受容 ー「専門知」と「信頼」の間でー
山本 沙希	西村 大志	女性用下着の商品化とその時代 ー坂本幸一と鴨居羊子を中心にー
光中 千尋	永田 良太	「話し合い」談話にみられる学年間の差異 ー進行役発話と話し合いの展開過程に着目してー
小段かな	畑佐由紀子	日本語学習者の教室での不安感に関する研究 ーイギリスオックスフォード・ブルックス大学の学生を対象としてー
浮池 一希	倉地 暁美	ホームレス支援における行政と NPO 団体の連携 ーある地方都市のホームレス自立支援事業からー
杉浦 一平	西村 大志	映画からみる通過儀礼
友尻 亜耶	柳澤 浩哉	村上春樹小説における会話の方法 ー『風の歌を聴け』を事例にー

お祝いの言葉

日本語教育学講座主任 畑 佐 由紀子

この3月をもって、長年日本語教育学講座のためにご尽力くださった町博光先生がご勇退される。先生は、昭和49年3月広島大学教育学部を卒業、同51年3月同大学大学院文学研究科博士課程前期を修了、同53年3月同大学大学院文学研究科博士課程後期を中途退学され、同53年4月広島大学文学部助手、同54年4月広島女子大学講師、同57年4月広島女子大学助教授、同63年10月広島大学教育学部助教授、平成11年4月同教授、同13年4月同大学大学院教育学研究科教授と、通算25年にわたり広島大学で教鞭を執られた。この間、120名あまりの学生の論文指導を担当され、多くの優秀な人材を学界に送り出された。

また、広島方言をはじめとする中四国地域の方言の研究や奄美方言や語彙位相論分野の研究において、多くの業績を残され、平成2年11月には沖縄文化協会より第11回沖縄文化協会賞を授与された。

講座・研究科では、各種委員会の委員長、委員として運営にご尽力された他、広島大学福山中学校・高等学校校長、広島大学評議会教育学プログラム開発準備部会委員を務められるなど、大学の管理運営にも貢献された。さらに、国立国語研究所共同研究員、独立法人日本語学術振興会の特別研究員等審査会専門委員及び国際事業委員会書面審査委員、全国国立大学付属学校連盟副理事長・校園運営委員会副会長、広島県教育委員会文化財課の「ことばについて考える100人委員会」幹事、財団法人広島国際センター評議員、大竹市地域キャリア教育推進委員会など様々な役職を歴任された。

先生は、目に見えないご功績も多々残された。人生のメンターとして、公私ともに講座の学生、特に留学生に対する温かいご支援を頂き、異国での心細さを癒やされた学生も少なくないと察する。先生の畑での芋掘りや季節の野菜の収穫などの話で、院生控室が和んでいたのを思い出す。私事ながら、生まれてから一度も蛭をみたことがないという私の学生をご自分の車で蛭見物に連れて行って下さり、その学生が、親兄弟に送った蛭の写真は今でも大事にしていることを思う度に、先生の暖かさを感じる。

本当は先生に教えて頂きたいことは多々あり、もっと現役を続けて頂けないかと思う。名残りはつきないが、在任中のご指導への感謝を申し上げるとともに、先生の益々のご活躍とご健勝をお祈りし、お祝いの言葉としたい。

長い間本当にありがとうございました。

町 博光教授 略歴・業績

1. 職歴等

昭和25年9月 鹿児島県大島郡与論町に生まれる
昭和49年3月 広島大学教育学部高等学校教員養成課程（国語）卒業
昭和51年3月 広島大学大学院文学研究科博士課程前期国語学国文学専攻終了
昭和53年3月 広島大学大学院文学研究科博士課程後期語学国文学専攻中途退学
昭和53年4月 広島大学文学部助手
昭和54年4月 広島女子大学文学部講師（国語学）
昭和57年4月 広島女子大学文学部助教授
昭和63年10月 広島大学教育学部助教授
平成元年11月 第11回沖縄文化協会賞受賞
平成11年4月 広島大学教育学部教授
平成11年5月 尚志会理事「至平成24年」
平成13年4月 広島大学大学院教育学研究科教授に配置換え「現在に至る」
平成13年11月 インドネシア教育大学客員教授「至14年10月」
平成18年4月 広島大学附属福山中等学校校長（併任）「至22年3月」
平成20年4月 全国国立大学附属学校連盟副理事長「至22年3月」
平成22年4月 全国国立大学附属学校連盟副評議員「至23年3月」
平成22年4月 日本方言研究会代表世話人「現在に至る」
平成23年4月 インドネシア教育大学招聘教授「至25年3月」
平成26年3月 定年により退職予定

2. 学界・社会活動

教育学部・大学院教育学研究科において各種委員会委員を歴任し、学部及び大学院並びに大学の運営に積極的に参画した。平成13年全学教務委員・広島大学評議会教育学プログラム開発準備部会委員。平成17年と平成22年日本語教育学講座主任。平成18年4月から平成22年3月、福山附属中学校・高等学校校長を勤めた。平成20年4月からは全国国立大学附属学校連盟副理事・同評議員・校園運営委員会副委員長を歴任。この間、鹿児島大学・松山東雲女子大学・兵庫教育大学・三重大学・鳥取大学・沖縄県立芸術大学で集中講義を担当。

学界では、平成19年から日本方言研究会世話人、同22年5月から日本方言研究会代表世話人、平成21年8月から平成23年7月まで独立法人日本学術振興会の特別研究員等専門委員及び国際事業委員会書面審査委員、平成23年度から国立国語研究所共同研究員。平成元年には奄美諸島方言の研究で、第11回沖縄文化協会賞（金城朝永賞）を受賞。

社会活動では、広島市教育委員会「都市生活研究会」委員、広島県教育委員会「ことばについて考える100人委員会」幹事、財団法人広島国際センター評議員、大竹市地域キャリア教育推進委員などを歴任。平成2年から3年にかけて、NHK広島放送局で1年間「今じゃけえ広島弁」を担当。平成4年には中国放送で1年間「よがんす放送局」を担当した。

I. 著 書

1. 広島県太田川上流域言語地図集 共編 昭和50.11 柴田武・広島大学
国語国文学研究室有志
2. 広島島根両県接境域言語地図集 共編 昭和53.3 広島大学方言研究会
3. 日本語方言学—その課題と方法— 共著 昭和54.8 東京堂出版
(第9章 方言伝播の道(1) —海路と川路の場合—)
4. 広島県方言緊急調査報告書 共著 昭和56.3 広島県教育委員会
5. 農業社会の食生活語彙 単著 昭和57.3 溪水社
6. 方言研究ハンドブック(第3章 方言調査法 方言地理学調査の体験) 共著 昭和59.4 和泉書院
7. 講座方言学2 方言研究の問題(11 方言研究の文献解題) 共著 昭和61.5 国書刊行会
8. 芸備接境域方言の方言地理学的研究 単著 昭和62.3 溪水社
9. 漁業社会の食生活語彙 単著 平成元. 3 溪水社
10. 今じゃけえ広島弁 監修 平成3.3 第一法規出版
11. 教職科学講座第25巻日本語教育学 共著 平成4.9 福村出版
(第9章 日本語語彙論・意味論)
12. 神楽の方言 単著 平成5.5 青木出版印刷
13. 太田川流域の方言分布—広島市域編— 共編 平成5.5 広島市都市生活研究会
14. 広島県太田川流域方言地図集 共著 平成6.3 自家版
15. もみじⅡ—ひろしまで学ぶにほんご— 共編 平成6.3 広島県
16. 方言の現在第2章 方言の崩壊と再生の「中間方言の形成—琉球方言の現状と新沖縄口の展開」 共著 平成8.3 明治書院
17. 日本語文末詞の歴史的研究(「奄美諸島与論島朝戸方言のヤ行文末詞」) 共著 平成10.3 三弥井書店
18. ひろしまべん100話 単著 平成11.12 溪水社
19. 瀬戸内海圏環境言語学(「中国山地域方言の動態—「瀬戸内海言語図巻」との比較から—」pp.67-79) 単著 平成11.3 武蔵野書院
20. 方言語彙論の方法 共著 平成12.3 和泉書院
(「対照方言語彙論の展開」pp.135-147)
21. 広島市域方言分布図集 共著 平成13.3 広島市市民局生活文化部
文化担当
22. 朝倉日本語講座10 方言 共著 平成14.10 朝倉書店
(「第5章 方言の語彙と比喩」pp.88-104)
23. 「先賢の志」に学ぶ—二十一世紀の教育を問う— 共著 平成16.4 ジャパン総研
pp.1-201
24. 講座 日本語教育学 第2巻 言語行動と社会・文化 編著 平成18.9 スリーエーネットワーク
pp.1-253(「第5節 方言学・位相論」pp.72-86を佐々木史と共同執筆)
25. 講座 日本語教育学 第6巻 言語の体系と構造 共著 平成18.9 スリーエーネットワーク
pp.1-263(「第5節 意味体系」pp.69-80 担当)
26. 瀬戸内海事典 pp.1-590 共著 平成19.12 有限会社 南々社
(「第5章 はなす・うたう」pp.291-300執筆)
27. 方言の山野を歩く～藤原与一文庫目録～ pp.1-149 単著 平成23.3 広島大学出版会
28. これからの語彙論 共著 平成24.2 ひつじ書房
29. 大学的 広島ガイド—こだわりの歩き方 pp.1-379 共著 平成24.3 昭和堂
(「広島弁概説—備後バーバー安芸ガラス」pp.143-155執筆)

<論文>

1. 香川県小豆郡土庄町肥土山方言の副詞語彙について 昭和51.3 内海文化研究紀要 第4号 広島大学文学部内海文化研究室
2. 地域の生活と方言地理学—広島県太田川上流域言語地図の解釈を通して— 昭和51.8 広島民俗 第6号 広島民俗学会
3. 与論島朝戸方言の文末詞—資料報告— 昭和51.12 方言研究年報 統一 広島方言研究所
4. 与論島朝戸方言における体言化表現法 昭和52.6 国文学攷 第74号 広島大学国語国文学会
5. 広島県高田郡美土里町本郷方言の衣食住語彙並びに同索引 昭和52.10 広島大学方言研究会会報 第23号
6. 愛媛県温泉郡中島町字和間方言資料 昭和53.3 内海文化研究紀要 第6号 広島大学文学部内海文化研究室
7. 生口島御寺方言の語アクセント 昭和54.3 内海文化研究紀要 第7号 広島大学文学部内海文化研究室
8. 呼びかけの表現 昭和54.5 広島大学方言研究会会報 第25号
9. 南島方言の形容詞—[san] [jan] 両活用語の意味・用法差— 昭和54.5 日本方言研究会発表原稿集 第28号
10. 与論島朝戸方言の係助詞 [du] について 昭和55.3 広島女子大学文学部紀要第15号
11. 与論島朝戸方言の形容詞—[san] [jan] 両活用語の意味・用法差— 昭和56.3 広島女子大学文学部紀要 第16号
12. 与論島朝戸方言の動詞 najuN (「なる」) の意味記述 昭和56.10 方言研究年報 続六 広島方言研究所
13. 与論島方言 昭和57.8 国文学 解釈と鑑賞 第47巻9号 至文堂
14. 対他的条件法と対自的条件法—与論島朝戸方言・国頭村宇嘉方言を例として— 昭和58.3 広島女子大学文学部紀要 第18号
15. 温井地区の耕作地名 昭和58.3 滝山峡—自然と生活—
16. 西表島舟浮集落の方言敬語法 昭和59.3 広島女子大学文学部紀要 第19号
17. 南島方言の身体部位称 昭和59.5 国語語彙史の研究 第5号 国語語彙史研究会
18. 開田と命名 昭和60.1 文教国文学 第16号
19. 奄美諸島方言の形容詞 昭和60.3 方言研究年報 通巻第27巻 広島方言研究所
20. 生業差による食生活語彙の体系差 昭和62.3 方言研究年報 通巻第29巻 広島方言研究所
21. 南島方言の副詞の造語法—疊語形式語の強調心理— 昭和62.11 琉球方言論叢 琉球方言論叢刊行委員会
22. 与論島方言の接頭辞 昭和63.10 方言研究年報 通巻第30巻 広島方言研究所
23. 芸備接境域方言における語アクセントの変容—「雲」と「糸」のぼあい— 平成元.3 言語習得及び異文化適応の理 論的実践的研究 (2) 広島大学教育学部日本語教育学科
24. 生業差による食生活語彙の体系差 (2) 平成元.8 広島女子大国文 第6号
25. 愛媛県宇摩郡新宮村字上山集落の祝言のあいさつ 平成3.4 方言資料叢刊 第1号 方言研究ゼミナール pp.261-266
26. 鹿児島県大島郡与論町朝戸における祝言のあいさつ 平成3.4 方言資料叢刊 第1号 方言研究ゼミナール pp.307-312
27. 方言談話分析の一視点—係助詞「は」の音声相— 平成4.3 小林芳規博士退官記念 国語学論集 汲古書院
28. 島根県仁多郡横田町下横田の方言 平成4.6 国文学 解釈と鑑賞 第57巻7号 至文堂
29. 琉球方言の現在 平成4.8 日本語学 第11巻第9号 明治書院
30. 鹿児島県大島郡与論町朝戸方言における身体感覚を表すオノマトペ 平成4.4 方言資料叢刊 第2号 方言研究ゼミナール pp.264-268
31. 神楽の方言 平成5.3 国文学攷 137号 広島大学国語国文学会
32. 鹿児島県大島郡与論町朝戸方言における比喩表現 平成5.4 方言資料叢刊 第3号 方言研究ゼミナール pp.277-281
33. 広島県太田川中流域の方言分布 平成6.3 広島市公文書館紀要 第17号 pp.33-42
34. 芸備接境域方言の [ai] 連母音の同化現象 (2) 平成6.10 国語方言の生成と展開 和泉書院 pp.59-72
35. 鹿児島県大島郡与論町朝戸方言のアスペクト 平成6.11 方言資料叢刊 第3号 方言研究ゼミナール pp.277-281

36. 広島県方言の韻律の聴覚的・音響的研究～単語レベルと文節レベルの比較を中心に～ 共著 平成7.3 広島大学日本語教育学科紀要 第5号 pp.21-31
37. 方言語彙の消長—中国山地三集落調査から— 平成7.3 ことばの世界 北海道方言研究会 pp.374-380
38. 鹿児島県大島郡与論町朝戸方言の否定の表現 平成7.12 方言資料叢刊 第5号 方言研究ゼミナール pp.333-338
39. 広島県方言の韻律の聴覚的・音響的研究(2)～単語レベルと文節レベルの全国共通語との対照～共著 平成8.3 感情・態度を表す日本語音声の表出診断・訓練プログラムの構築に関する研究 pp.83-98
40. 全国共通語と広島方言の韻律の対照研究～名詞・副詞同形語のアクセントの使い分けを中心に～ 共著 平成 8.3 感情・態度を表す日本語音声の表出診断・訓練プログラムの構築に関する研究 pp.63-82
41. 奄美諸島与論島方言の否定表現—nu (<ヌ) と dzi (<ズ) の用法差を中心に— 平成8.4 言語学林 1995-1996 三省堂
42. 広島の食と方言 平成 8.7 ひろしまの四季食彩 中国新聞社 pp.176-177
43. 鹿児島県大島郡与論町朝戸方言の助数詞 平成 8.11 方言資料叢刊 第6号 方言研究ゼミナール pp.351-362
44. 鹿児島県大島郡与論町朝戸方言の待遇表現 平成9.12 方言資料叢刊 第7号方言研究ゼミナール pp.224-229
45. 広島県灰塚ダム周辺の民俗資料—方言— 平成 10.3 灰塚ダム湖とその周辺の民俗同刊行会 pp.791-811
46. 広島県灰塚ダム周辺の民俗資料—民間習俗— 平成10.3 灰塚ダム湖とその周辺の民俗同刊行会 pp.753-757
47. 中国山地方言の変容 平成11.2 加計町誌 民俗編 同刊行会
48. 中国山地方言の動態 平成11.3 瀬戸内海域環境方言学 武蔵野書院
49. 日本語俗語の意味特徴 平成11.3 日本語表現法論攷 pp.256-268
50. 広島方言の疑問文末詞「か」のイントネーション—「しんにほんごのきそI」の読み上げ資料を中心に— 平成11.3 日本語教育の交差点で～今田滋子先生退官記念論文集～ 溪水社 pp.26-35
51. 奄美諸島方言の対照方言語彙論的研究 平成 11.11 学位論文
52. 日本語俗語の音声的特徴 平成12.3 国文学攷 pp.1-11
53. 琉球方言の対者待遇発想の表現 平成12.7 日本語学 第19巻第8号 pp.61-69
54. 日本語の俗語と英語の俗語 平成13.3 広島大学日本語教育研究 第11号 pp.49-54
55. 中韓三国語における「日」の表現の対照研究 平成13.3 日本文化研究(大連外国語学院) 第二集 pp.323-342
56. 瀬戸内海域方言の動態—瀬戸内海言語図巻』の追跡調査による— 平成14.9 創立15周年記念事業 瀬戸内海に関する研究 (財)福武学術文化振興財団 pp.171-191
57. 「おまえの家に来る」の表現 平成15.10 表現研究 第78号 pp.25-32
58. 方言語彙の分類 平成16.4 日本語学 第23巻第4号 pp.61-69
59. 奄美諸島方言の世代間変容—場面設定の対話資料から— 平成16.9 社会言語科学 pp.75-83
60. 集団語のはたらき 平成18.9 日本語学 第25巻第9号 pp.6-13
61. 広島市方言における尊敬表現法の研究 平成 19.4 総合学会誌 第6号 pp.5-12
62. 現代日本語と諸外国語の男女差 平成19.3 日本語教育学を起点とする総合人間科学の創出(広島大学教育学研究科日本語教育学講座推進研究) 平成18年度報告書 pp.127-155
63. 生活即研究—藤原与一先生を偲ぶ— 平成20.3 広島民俗 第69号 pp.1-5
64. 鹿児島県大島郡与論町朝戸方言の立ち上げ詞 平成20.3 広島大学日本語教育研究 第18号 pp.27-34
65. 現代日本語の位相論的研究 (「I 方言の共通語訳から見えてくるもの」pp.150-154執筆) 平成 20.3 日本語教育学を起点とする総合人間科学の創出(広島大学教育研究) 平成19年度報告書 pp.150-180
66. 沖縄大和ことばの文末詞 平成21.3 日本語教育学を起点とする総合人間科学の創出 平成20年度報告書 pp.61-68
67. 琉球語奄美諸島方言の世代間変容 平成24.3

日本語言文化研究 第2輯(下) pp.331-337
68. 日本語方言文末詞の生成と発展 平成25.3 国
文学致 第217号

<書評・その他>

1. 与論島朝戸方言の係助詞 [du] について (発
表要旨) 昭和52.12 国語学 117集 国語学会
2. 「蟻地獄」について 昭和54.9 広島女子大学
国文学会会報 第8号
3. 方言調査余録 昭和55.9 広島女子大学国文学
会会報 第10号
4. 方言敬語法研究の一視点 昭和56.3 広島女子
大学国文学会会報 第11号
5. 藤原与一先生著作目録(方言関係) 昭和56.3
方言学論叢Ⅱー方言研究の射程ー
6. 書評:『奄美・与論方言の体言の語法』 昭和
57.2 沖縄タイムス
7. 与論島方言 昭和58.4 沖縄大百科辞典
pp.298-299
8. 農具の方言①～④ 昭和61.3 中国新聞夕刊
9. ひろしまことば (1)～(80) 昭和61.4～平成6.4
けんみん文化 第2巻1号～第10巻第1号
10. 広島の方言 平成元.3 学習研究社 pp.298-
299
11. 書評:『瀬戸内離島物語』 平成2.3 しまりポー
ト 第22号
12. 書評:国立国語研究所編『日本方言親族語彙資
料集成』 平成3.3 国語学 第168集 国語学会
13. 留学生と広島弁 平成3.7 図書館だより(広
島市立図書館)通巻422号
14. みにくいあひるのこ 平成3.11 コミュニティ
ひろしま No.72
15. 方言敬語の消長ー中国山地三集落調査からー
(発表要旨) 平成4.3 国語学 第168集 国語学
会
16. 書評:水半球の小さな大地 平成4.7 しまり
ポート 第43号
17. 与論島朝戸方言音節一覧 平成 5.3 琉球列島
における音声の収集と研究Ⅱ
18. 新ひろしまことば (1)～(48) 平成6.5～10.6
けんみん文化 第10巻2号～第14巻第1号
19. 琉球方言の魅力 平成7.4 聖教新聞
20. 島の方言調査①～⑧ 平成9.1 中国新聞
21. 全国方言一覧辞典 平成10.12 学習研究社
22. 奄美諸島方言と南九州方言の対照方言語彙論的
研究 平成12.3 平成9～11年度文部省科学研究
費補助金(基盤研究(C)(2))研究成果報告書
pp.298-299
23. 現代方言事情～消える方言, 生まれる方言～
平成13.9 広島大学教務委員会 第1回いま方言
は pp.1-10 第2回〈座談会〉これからの方言
pp.71-77
24. トンコナンハウスと水牛 ～タナ・トラジャの
旅～ 平成14.4 しまりポート 第98号
25. 〈小事典〉ふるさとのことば 広島県 平成
15.1 言語 第32巻第1号 pp.96-97
26. 日本語教科書と国語教科書との語彙比較 平成
15.3 リサーチ・オフィス共同研究プロジェクト
報告書 第1巻 pp.37-46
27. 国語教科書と日本語教科書 平成15.11 「翻訳
作品の教材化」研究(言語文化研究プロジェクト
報告集) pp.1-6
28. バイリンガルとしてみた奄美諸島方言の位相論
的研究 平成17.3 平成14年度～平成16年度科学
研究費補助金(基盤研究(c)) 成果報告書
pp.1-120
29. 奄美諸島方言と南九州方言における 平成19.3
平成17年度～平成18年度科学研究費補助金(基盤
研疑似標準語成立過程の対比的研究(c)) 成果
報告書 pp.1-111
31. 『ひろしま弁かるた』 平成21.3 広島テレビ放
送
30. 奄美諸島における社会構造の変容と方言語彙の
変容の対比的研究 平成22.3 平成19年度～平成
21年度科学研究費補助金(基盤研究(c)) 成果報
告書 pp.1-115
31. 『附属学校歳時記』 平成22.3 広島大学附属福
山中等高等学校
32. よりどり広島弁 (1)～(25) 平成23.4～12
Cue 東広島版(フリーペーパー)
33. 方言学のフィールド 平成24.5 生活語学研究
会

執筆者紹介

松見 法男（日本語教育学講座 教授）

柳澤 浩哉（日本語教育学講座 教授）

高橋恵利子（日本語教育学講座 助教）

小谷沙緒里（プラナコン・シー・アユタヤ・ラチャパット大学 人文学部日本語学科 常勤講師）

松島 弘枝（言語文化教育学専攻日本語教育学専修 博士課程後期大学院生）

李 種恩（言語文化教育学専攻日本語教育学専修 博士課程前期大学院生）

第24号 紀要編集委員会

中村 春作・高橋恵利子

編集後記

例年になく大雪が続き、寒さの厳しいこの冬、学位論文最終審査、修士論文審査、卒業論文審査等々の騒然とした時間のなかで、この「後記」を書いている。

日本の大学で課程博士が制度として動き始めてから、それなりの時間が経過した。本学でも、規定年限内に論文を完成させることが求められるようになり、また全国学会誌での掲載論文2報がその前提条件とされるようになって、大学院生は、かつてよりはるかに気ぜわしい時間の中で、次々と成果を出すことを求められるようになってきた。

そうした趨勢のなかで、講座紀要や研究科紀要が果たすべき役割とは何か、あらためて問い直す時期が来ているのかもしれない。紀要は所属教員の研究発表の場であり、また若手研究者、大学院生が腕を磨く場でもある。追い立てられるように短期的な成果を出さなければいけない今日状況の中で、最新の研究成果はもちろんのこと、息の長い研究の一過程や、丹念な資料調査、基礎研究の成果を、着実に蓄積していく場として、本紀要が役立つことを願っている。

なお、本号には、在籍教員、院生の他に、すでに教育現場に就職した元大学院生（前期課程修了生）からの論考も収載した。本講座には外国人留学生が多数在籍し、大学院修了後、母国に帰って大学の教員を務めている者も多い。そうした人たちの研究成果公表の場としても、本紀要をさらに開かれたものとして充実させていきたいと思う。

（S記）